

曲目解説

叙情組曲「蝦夷」

鈴木 静一 作曲



Seitichi Suzuki

作者は日本のマンドリン文化を作品の面で支えてきた最大の功労者である。1901年、東京生まれ。A.サルコリの元で声楽家を目指すも師の勧めで断念し、マンドリンを弾き始める。1924年、イタリアに渡る。途中シベリウスに会い才能を認められ作曲活動を開始。1927年、オルケスタ・シンフォニカ・タケイ 主催の第1回作曲コンクールに「空」が2位入賞した。処女作「山の印象」を発表後、多数の作品を発表したが、1936年、日本ビクター入社と共にマンドリン界から一時身を遠ざけた。1965年に復帰するまで、約450曲に及ぶ映画音楽、流行歌の作曲を手掛け、商業音楽の世界で、頂点を極める活躍をした。黒沢明監督「姿三四郎」や“たんたんたぬきの〜”の替え歌で歌われた「煙草屋の娘」が有名。多くのマンドリン合奏曲、クラシックの編曲作品を発表すると同時に、数多くの学生マンドリンクラブの技術指導にも情熱を注ぎ、マンドリン音楽の繁栄に大いに貢献した。1980年5月27日、惜しまれながら永眠。本曲は、作者が北海道の或る海辺の村で一夏を過ごした時の作品で、自身の交響管弦楽の為の処女作である。

当時官民を通じ、最も完備された交響楽団であった帝国海軍軍楽隊の交響楽団に捧げられ、1935年日比谷公会堂で初演された。後に若干の削除が加えられ1966年マンドリンオーケストラに移されたものである。

- 霧深き朝** 北夷の夏の海は冷やかで、朝はよく濃霧がおこる。その浜は日本海に面し、朝の陽を背にして眺める海は、渚を洗うさざ波もなく、大いなる湖のようで静かに漲っていた。朝霧は太陽の昇るにつれ、次第にうすれ濃藍の海が洋々と展開される。
- 牧場の歌** 曲はかっこうのなきごえを模したリズムに始まる。霧深い日や、日暮れには恐ろしいひくまが出る牧場も、日盛りは明るいのかな牧場である。そして臆病な馬も警戒を忘れ、三々五々群れ遊ぶ。可憐な子馬が群から離れるのを呼ぶ母馬のいななぎがその山裾の草原にエキゾチックな色どりを添えている。亜寒帯の木のごすえでなくかっこうの声か牧歌ムードをいやが上にも盛り上がる。
- 秋の声** 北夷の夏は短い。7月に入ると野山に桔梗が咲き、8月にはもう朝夕の空気が冷たくなる。やっと緑の濃くなった草むらに、そこはかとなく褐色がたどよい、田は早くも白銀の穂を垂れる。木々の若緑から一足飛び、紅葉の気配を見せる。思いがけない渡鳥が南に向かって飛ぶのを見るのもこの頃である。
- 黄昏の帰還** 太陽が西に傾くと“やませ”と呼ぶ夕風が、一日中眠りこけていた海面に白波をたてる。この風を帆に受け多くの漁舟が帰ってくる。そして、寂しい北の海もこの時だけ、澁刺と活気づく。快走する漁舟は漁の豊かさを思わせ、浜には人影が並ぶ。西に広がる海洋に落ちる太陽は雄大である。夕陽が水平線に近づくと、海はまばゆく輝く。その海面を次々と漁舟のシルエットが横切る。舳先に砕ける飛沫が朱色の宝石を撒きちらすが、かぎりなく華やかである。輝かしい一日のフィナーレである。

(鈴木静一記)

CONCERTINO pour Harpe et Instruments a cordes

ハーブと弦楽の為のコンチェルティーン

Jean-Michel Damase (ジャン=ミッシェル・ダマーズ) 作曲

平佐 修 編曲



ダマーズは1928年フランスのポルドーに生まれた。幼少時より音楽の才能を発揮。ハーブ奏者を母に持ち9歳から作曲を始め、エコールノルマル音楽院を経て13歳でパリ音楽院に入学し、アルフレッド・コルトーにピアノ、アンリ・ビュッセルに作曲、マルセル・デュプレに和声・対位法をそれぞれ師事。1943年にピアノ科で一等賞を受賞して卒業する。

1947年、カンタータ「そして美女は目覚めた」でローマ賞を受賞する。以後、作曲家・ピアニストとして積極的に活動するほか音楽教育にも力を入れ、パリ音楽院の副院長もつとめた。

室内楽曲をはじめとする器楽曲の作曲で知られ、フルートの作品、母親の影響もありハーブの作品も多い。ブレーズやメシアンなど前衛的な現代音楽が大勢を占めた20世紀前半のフランス音壇において、タイユフェール、ベルトミュール同様、近代フランス音楽の伝統に立脚した簡素なロマン派様式をとり、新古典主義音楽に基礎をおいた優美な旋律を特徴とする作風を展開した。その為あまり評価を受けられない状況が続いたが、近年は複数の作品集がCDとして発売され、再評価

が高まりつつある。

本曲は 1951 年に出版。ハープと弦楽合奏の為に書かれた、単一楽章の小協奏曲である。パートによっては、異なる拍子で書かれている箇所が何箇所あるが、独特のエスプリに満ちた、流れるような美しいメロディーと移り気な和声進行はエレガントで、世界のハーピストには人気の高い作品である。

マンドリン合奏への編曲は、ギタリスト平佐修氏が札幌のマンドリン・オーケストラ ムジカ・クラシカ“T”の為に編曲。第 5 回定期演奏会(2003 年 3 月 21 日金曜日 札幌コンサートホール *kitara* 大ホール)にて 橋直貴(2001 年第 47 回ブザンソン国際指揮者コンクール準優勝)の指揮、武川奈穂子のハープで初演され大好評を得た。

※本日は、ハープの部分をピアノに代え「ピアノと弦楽の為にコンチェルティーノ」として演奏します。

Simple Symphony Op.4

Edward Benjamin Britten (エドワード・ベンジャミン・ブritten) 作曲

シンプル・シンフォニー

小穴 雄一 編曲



ブrittenは、1913 年イングランド東部サフォーク州に生まれ、1976 年同地に没したイギリスの作曲家・指揮者・ピアニストである。代表作には本作のほか、歌劇「ピーター・グライムズ」(1945 年)、「青少年のための管弦楽入門」(1945 年)、「戦争レクイエム」(1962 年)などがある。

彼は、20 世紀を代表する作曲家のひとりであるが、同時代に活躍した作曲家の多くが、複雑で難解ないわゆる「現代音楽」を追求したのとは異なり、親しみやすいメロディ、必要最小限の不協和音、明晰な音楽の構造などを特徴とした作風を一貫して持ち続けた。その結果彼の音楽は多くの人に受け入れられ、イギリスの国民的作曲家と称されるに至った。

ブrittenは早熟の天才で、幼いころから作曲を楽しんでいたらしい。本曲も、9歳から 12 歳のときに書いたピアノ曲をもとに作られているといわれる。13 歳の時から音楽理論と作曲を学び、16 歳でロンドン王立音楽大学に入学した。在学中に、ウィーンに留学しアルバン・ベルクに師事することを志すが、大学側の反対により頓挫したという。もしもこれが実現していたら、彼の作風も大きく変わっていたかも知れない。本曲は、1933 年、ブritten 20 歳のときの作品であるが、先述のとおり、子供時代に書かれたスケッチがもとになっている。シンフォニーと銘打たれてはいるものの、交響曲というよりは新古典主義的な雰囲気を持つ組曲というべき作品である。全体的には軽いタッチに仕上がっているが、主題をきびきびと展開してゆく手法は実に見事であり、全編にわたり機知あふれる曲想はいかにも早熟の天才の筆を思わせ心地よい。

第 1 楽章：騒々しいブーレ Boisterous Bourrée, Allegro ritmico

1923 年の歌、1926 年の組曲第一番によるソナタ形式。

ごく短い序奏の後で、急かされるような旋律を各パートが受け渡してゆく。ゆったりとした旋律を時折りはさみながら、次第に緊張感を高めてゆく。最後はコーダに入り、ppp のピッツィカート打ちが次の楽章を予感させる。

第 2 楽章：おどけたピッツィカート Playful Pizzicato, Presto possibile pizzicato sempre

1924 年のスケルツォ、同年の「歌」による複合三部形式。

全編ピッツィカートで演奏するユーモラスな 6 拍子の曲。トリオ部分はどこかイギリス民謡風である。曲は冒頭へと帰り、コーダに入って勢いはそのままに曲を終える。マンドリン合奏では、減多に使用しないピッツィカート奏法で演奏する。

第 3 楽章：感傷的なサラバンド Sentimental Saraband, Poco lent e pesante

1925 年の組曲第 3 番、1923 年のワルツによる複合三部形式。

前の楽章とは対照的に、しっとりとした落ち着いたシリアスで重々しい楽想が、悲壮な情熱をたたえて進行してゆく。中間部の穏やかなワルツを経て、再び冒頭の楽想がさらなる絶望感を連れてくる。最後は最弱音で消えるように終わる。

第 4 楽章：浮かれ気分のフィナーレ Frolicsome Finale, Prestissimo con fuoco

1926 年のピアノソナタ第 9 番、1925 年の「歌」によるソナタ形式。

短い序奏の後、いきなり疾走を始める第 1 主題。爽やかな第 2 主題で気分を変えた後、第 1 主題が展開される。全休止の後、さらに増してゆく勢いが頂点に達した時、一瞬の静寂を経て、晴れやかなコードが全曲の終わりを告げる。

マンドリン合奏への編曲は、小穴雄一氏が、プレクトラムソサエティ(東京)の為に編曲。第 3 回定期演奏会(2008 年 4 月 28 日日曜日 第一生命ホール)にて 自身の指揮で初演され大好評を得た。

Ouverture Historique No. 2 (歴史的序曲第2番)

帰山 栄治 作曲

作者は1943年福井県大野市に生まれ、62年名古屋大学文学部入部と同時にギターマンドリンクラブに入部、1年後指導者となった。その後中田直宏氏に作曲を学び、クラブ内外で編曲を含め多くの作品を発表してきた。またチルコロ・マンドリニスティコ・ナゴヤをはじめとして、東海地区の大学・社会人のマンドリン団体を数多く指導しており、現在日本マンドリン連盟中部支部理事、東海音楽舞踊会議運営委員長をつとめる。作品は多岐に亘り、マンドリン合奏曲以外にもギター合奏曲、邦楽、室内楽、独奏曲、歌曲、合唱曲、劇音楽、舞踊音楽など百数十曲。マンドリン合奏への編曲作品も二百数十曲あり、特に、ロシア民族楽器オーケストラ曲の編曲には注目すべきものがある。

1981年名古屋市芸術奨励賞受賞。1984年及び1988年、名古屋マンドリン合奏団と共に団長兼指揮者として旧ソ連公演。同合奏団の1992年の中国公演と1996年のオーストラリア公演に音楽監督兼指揮者として参加。現在、マンドリン合奏トレーニングのためのEnsemble ESCHUEを主宰指導。

本曲は、「Ouverture Historique」と冠されたシリーズの第二作である。シリーズタイトルの「Ouverture Historique」(ウヴェルチュール・イストリーク)は、フランス語である。直訳すれば、「歴史的序曲」。もっとも、フランス語の“Ouverture”が元々持っている「切り拓く」という意味も込められているので、このタイトルの含意にはさらなる広がりがある。曲は、主題を暗示したベース、マンドチェロの不気味な序奏から、5/8拍子を主体とした主題(楽譜Ⅰ)へ入り、拍子は激しさが増すにつれて、いびつな世界に変化して行く。段々縦の線を太くしながら4/4拍子の力強い低音の旋律に導かれる。旋律は低音系からマンドリンに変わり、なおも拍子を激しく変化させながら5/4拍子の明るく軽い旋律へと続く。やがてそれは転調され、さびしく終わりながらも、低音系の旋律を暗示した部分に入る。牧歌的なメロディーは、ほのぼのとした優しさをかもしだしてくれる(楽譜Ⅱ)。この主題は少しずつ形を変え何度か繰り返され、そして静かに終わる。しかしこれこそが「Ouverture Historique」の系譜を結ぶ寂寞感の表出である。表に見える平穏とその背後にある鬱屈した閉塞感こそが、本作のもつ『宿命的な淋しさ』と『人間存在の矛盾』を描き出している。突然断ち切られて現れるのは三つ目の主題である。それはVivacissimoで劇的に恐ろしいほどの圧迫感で迫り、2/4拍子の特異なリズムとして形を現す(楽譜Ⅲ)。このモチーフは低音系の力強いリズムに結ばれ、大きな流れを構成していく。理解され得ない自身の行き場の無い焦燥感、崩壊寸前の自我やそれに相反する形での解放がそこにある。その熱いたぎりは、2/4拍子から7/8拍子へ、6/8拍子へと目まぐるしく移り、そして2/4拍子で時が止まるかの様に曲は突如終わる。

全体を構築しているテーマは、緊張と崩壊の上を不規則的に展開しながら激しく爆発する。

それが一点に到達した時の、息の止まる様な緊張感、他に類をみない。

The image shows the first three staves of the musical score for 'Ouverture Historique No. 2'.
- **楽譜Ⅰ**: The first staff, in 5/8 time, features a melodic line with a trill-like figure. It begins with a fermata.
- **楽譜Ⅱ**: The second staff, in 4/4 time, is marked 'Andante Lento' and 'mf espress'. It shows a more complex melodic line with a key signature change to one sharp.
- **楽譜Ⅲ**: The third staff, in 2/4 time, is marked 'All° Vivace' and 'f'. It features a driving, rhythmic bass line.

本曲は、名古屋大学ギターマンドリンクラブの第1回東京公演(1978年5月31日杉並区立公会堂)にあわせ、前作の「Ouverture Historique」を改作したものと発表。この初演の素晴らしさは、今でも語り継がれている。

本シリーズのそれぞれの作品には、内容・形式面での共通性はない。帰山氏によれば、その時点の自らの音楽感・作曲技法が提示されているとのことである。いわば作曲人生の「年輪」に相当するとも言えよう。1970年に第一作である「Ouverture Historique」を作曲。1978年に第二作(本曲)、1980年に第三作(No. 3)、1982年に第四作(No. 4)、1990年に第五作(No. 5)を発表。最新作は、2001年に名古屋大学ギターマンドリンクラブにより委嘱・初演された、「Ouverture Historique No. 6」である。No.2初演は当時大変に話題となったが、この曲は1970年台半ばから始まった東海地区の学生団体に因る、邦人作曲家(帰山栄治、藤掛廣幸、熊谷賢一、川島博、石川透、他)への委嘱・初演活動が全国に認知される様になった頃の、まさに代表的な作品であり、演奏回数も極めて多く、No.2を聴いて「カエリヤマ」の世界に傾倒する人が多いのも事実である。耳触りの良い邦人作品(新曲)が多数取り上げられている昨今だが、本曲の様な人間の生命力を力強くイメージした骨太の作品などもプログラムに加えて欲しい。

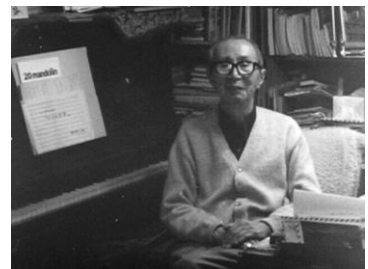
筆者は学生時代に、改作されたばかりの交響詩「北夷」(Op.26)を初めて耳にし、鳥肌が立つような感銘を受けた。その後、鈴木静一を自宅へ半ば押しかけるように訪ね、卒業後上京し数年指導を仰ぐことになる。あの時期にしかできない厚かましさであるが、青春まっただ中の私は音楽にとどまらず様々の影響を受けた。その後の私の人生を決めたのはやはりこの出会いだったろう。

数百の映画音楽を作曲した鈴木静一はあらゆる楽器に精通していた。マンドリン合奏曲の楽譜についても、各楽器の能力が十分に発揮できるよう手慣れた手法で書かれており、奏者にとっては所謂「楽譜が助けてくれる」という頼りになる譜面となっている。しかしこれが両刃の剣なのだ。不用意に弾くと心の中で音楽が熟成する間もなく流れ出てしまいかねない。その音楽は標題に基づく描写性も豊かでわかりやすい。しかし、それだけに、作品として完成させるのは容易ではない。

指揮者の重要な責務の一つは、一人ひとりの団員が思うままに奏で、かつ、全体として音楽の許容範囲から逸脱せず一つの表現となるようオーケストラを導くことである。しかし、整然と一糸乱れぬ演奏をすることのみが音楽のすべてではない。「奏でる」というのは単に楽譜を音にすることではなく、音符に命を吹き込む作業である。鈴木静一の音楽はこのことをいつも想起させてくれる。

鈴木静一は生涯にわたり標題音楽にこだわった。「黎明序曲」や「祝典序曲」のような形式(絶対)音楽の作曲を切望する周囲の声は高かったが、敢えて独自の劇的描写の世界に突き進んでいった。職業作曲家から退きマンドリン界へ復帰した後、ようやく自分のやりたかった仕事に向き合えたのかもかもしれない。「マンドリンは僕の命だからね…」いつものしわがれた声で呟くように言ったその言葉が今も耳に残っている。

本日は鈴木作品の中から「抒情組曲『蝦夷』」を演奏する。鈴木静一は戦前渡欧した際、イタリアのサンレモで偶然シベリウスに出会った。その時シベリウスにこの「蝦夷」のスコアを見せ、助言を得たという驚くべき逸話がある。鈴木静一



鈴木静一近影 1972 年筆者撮影

は「これも要らない、これも要らないとたくさん音を消されたよ」と苦笑しながら話していた。「北夷」の改作や後の「比羅夫ユーカラ」「雪の造型」「樺太の旅」など北方にテーマを求めた作品にその影響が出ているように見え、大変興味深い。

さくらの花が咲く頃に・旅立った友へ

コンサートマスター 山口 章太

悪い夢だ。訃報を聞き、足元が崩れて行く様な喪失感に包まれたまま、冷静を装い仕事に向かった。

しかし列車の窓から満開の桜を見た時、まるでせき止めていた何かがあふれ出る様に哀しみが僕を蝕んでいった。

第 39 回定期演奏会終演直後、スプリングホールの舞台袖で彼は突然倒れた。その後、長い闘病生活を送り、とうとう遠い世界へ旅立ったのである。出会いは、1982 年のマンドリン独奏コンクールの会場(大阪)。偶然隣に座った彼は、友人と来ていて、その会話の内容が知人の事だったので、僕は思わず彼等に声を掛けてしまった。数ヶ月後、友人から「後輩でマンドリンの凄く上手い奴を紹介する」と言われて会った瞬間、互いに驚いて笑ってしまった。当時彼はマンドリン教室の教師であった。ギターからマンドリンに持ち替え日の浅い僕は、生徒でもないのに厚かましくも、ピック保持、姿勢と脱力、移弦、運指、音色、音の遠達性から合奏、独奏のイロハまで教えて貰った。僕の方が歳は上なのに世話になりっぱなしだった。週末の度に 2 人でコンサートに行っては録音して、反省会と言う名目で明け方までその録音を何度も聴いた。1 年後、僕は福岡勤務となったが、入れ替わる様に、彼は僕が所属していたモザールマンドリンオーケストラ(大阪)に入った。その数年後コンサートマスターとなり、モザールの演奏技術は目覚ましく伸びた。しかし音楽に対する真摯な姿勢は、時として冷たく受取られる事もあった。コンサートマスターとしての互いの悩みは深夜の電話で相談し合った。しばらくして彼は弾く事を辞めた。理由はあえて聞かなかった。しかし僕は彼と一緒に弾きたかった。福シンを更に進化させる為にもその経験が必要だった。勝手な誘いを快く受け容れ、大阪から 10 年間やって来てくれた。無理だろうと思われる選曲の話も「それいいですねえ・・・ならばアンコールは・・・」と悪魔の様なささやきで後押しをしてくれた。第 40 回定期演奏会に於いて初演となったショスタコビッチの交響曲 5 番(革命)を一番待ちにしていたのは彼だった。この難曲の運指・移弦をどう考えるか? あの夜の様に話したかった。姿が見えなくなって 3 年、いつもの待合せ場所を通るだけで不思議な気持ちになる。廻りの誰もが、未だにこの事実を受け止める事が出来ないでいる。空を見上げた時、彼は何処かで見ているだろうか? と思う。きっとそうだ、今日の演奏も何処かで聴いているに違いない。彼のマンドリンは僕が弾いている。旅から戻って来ても、すぐ弾ける様にしておかないと叱られそうだ・・・